

教育・入試改革による高校の進路指導の変化予測

	Before	After	大学への影響
出願校検討 早期化	推薦・AO入試の指導 高校3年次の1学期末から開始	高校2年次の3学期に前倒し	▶入試情報は高校2年次の3学期までに高校生・高校教員に伝える
進路学習の 探究化	進路検討 なりたい職業から進路を考える	社会と自分の関わり方から進路を考える	▶大学の学びでどのような社会問題を解決できるかに高校生の関心が高まる
活動記録の 蓄積化	調査書 高校教員が紙に記録	高校生が自分で電子媒体に記録	▶eポートフォリオの入試での活用 ▶高校までの活動記録を大学に引き継いでの活用が可能に
学習の 個別化	個人学習 全員に同じ問題のプリントを配付	生徒の理解度に合わせた問題を個別配信	▶ICTを活用した個別学習に慣れた学生が入学してくる

4つの
キーワード
で見る

高校の 学び、進路指導の 「これから」



(株)ベネッセコーポレーション
初等中等教育事業本部
高校営業部 情報企画課課長

渡邊慧信

わたなべ けんじ ●高校教育や大学入試に関する調査・分析を基に、全国の高校に対して、生徒の成長や自己実現につながる情報提供や指導の提案を行っている。



高大接続改革、次期学習指導要領、ICTの活用などにより、高校の学び、進路指導は大きく変わろうとしている。進路指導のスケジュールや指導のあり方の変化は、大学の学生募集戦略に大きな影響を与える。また、高校での学びの変化は、大学での学修の見直しを迫るものにもなるだろう。ここでは、これからの高校の変化について、4つのキーワードを挙げて解説する。

1 早期化

入試改革で進路指導 スケジュールが変化

今、多くの高校では、生徒一人ひとりの出願校について、担任だけでなく、進路指導担当や管理職の教員も参加する進路検討会で話し合い、その結果を踏まえて最終的に三者面談で決めていきます。国立大学では中期目標の中で、推薦・AO入試の募集人員を入学定員の30%にまで拡大するとの目標が示されました。そのため、推薦・AO入試受験者が従来より増加することが見込まれます。加えて、「大学入学共通テスト」（以下、共通テスト）での外部英語検定試験の活用が開始されると、実質的に大学入試は検定受験が始まる高3の1学期からスタートすることになります。これらのことを考えると、現在、高3の1学期に行っている推薦・AO入試受験者の出願検討や受験指導は、高2の3学期に早まることが考えられます。

2 探究化

社会との関わり方へと 進路選びの観点が変化

2022年度から実施される次期学習指導要領では、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に変わるなど、自ら課題を設定して研究を進める探究的な学習を重視しています。その動きを先取りして高校では探究学習、課題解決型学習（以下、探究学習）の取り組みが盛んです。社会の課題解決について考える探究学習を通じて、社会と自分との関わり方を考えながら進路選択を行う指導が深まっていきそうです。そのため、探究学習の中で感じたことは、進路選択に大きな影響を与えることでしょう。生徒の進路選択の観点が、従来の「なりた職業から考える」から今後は「社会と自分の関わり方から考える」へと変化することが考えられ、今以上に「大学での学びと社会との関係」に高校生の関心が高まると予想されます。

3 蓄積化

高校での活動履歴が 入試や指導で活用可能に

新たな入試のルールでは、調査書に書かれた高校での活動記録をどの入試方式でも選抜に用いることが求められています。加えて、「調査書の様式は両面1枚まで」の制限を撤廃する方針が示されるなど、高校教員にとって生徒の活動記録の蓄積化は喫緊の課題となっています。

高校でのポートフォリオの活用は、主に、生徒の主体性を引き出すことを狙いとしています。学習の前後での理解度の変化を生徒自身が確認することで、学習成果を実感し、主体性を高めることを期待しているのです。

大学ではアドミッションポリシーに基づき、活動記録を選抜で活用するしかたを決めるほか、入学後の指導に生かす方法も検討すべきでしょう。高大をつなぐeポートフォリオのしくみの早期構築が待たれます。

4 個別化

ICTを活用して 個人学習の効率アップ

探究学習がすすむ中、高校ではグループ学習などの協働的な学習に割く時間が増えています。その一方で、基礎学力の定着にかける時間を授業中に確保することが難しく、家庭での効率的な個人学習は重要な課題となっています。そのため、ICTを活用する高校が増えています。

従来、紙で渡していた課題を、今では生徒のタブレット端末にテスト問題を配信して、採点、集計まで行います。さらに、配信する問題は個人ごとに変えることもできます。

このようなWebテストの利用は、「基礎学力は家庭の個人学習で、学校ではクラスメイトと協働学習」といった学習スタイルの形成をさらに推し進めます。高校での学習スタイルの変化に合わせて、大学での講義のあり方を見直す必要があるでしょう。

変化しつつある学校現場

(4つのキーワード)で示した変化が具体的に現れている学校現場の様子をダイジェストで紹介する。

早期化

高1から高2にかけて希望進路を明確化

岩手県立盛岡北高等学校

岩手県滝沢市▶普通科▶共学▶1学年約240人
▶進学実績 北海道教育大、岩手大、東北大、学習院大、東京理科大学

「学びたい学問」を軸に 低学年から進路検討

1年生では、3学期に決定する文理選択が進路選択の節目となる。そのため、年4回程度の進路希望調査や、二者・三者面談を通して進学先のイメージを膨らませ、生徒や保護者の意思を確認して、文理選択につなげている。

2年生は、2学期に行う希望する大学の志望理由書の作成が節目となる。10月から作成に着手し、修正とチェックを繰り返し、11月には完成させる。また、年3回実施する模試の前に面談を行い、志望校の検討を重ねている。

以前は職業研究↓大学・学部研究で進路指導を行っていたが、今は「学びたい学問」にこだわる指導を重視。1年生のうちから大学模擬講義に触れる機会を設けるなどして、大学で本当に学びたいと思える学問から進路を考え、3年生になるまでに希望進路を明確にする進路指導をしている。

Before

- 3年次に自分の希望や適性と志望学部が食い違うケースが見られた
- 職業研究を重視した進路指導

After

- 低学年での希望進路の明確化に重点を置いた指導
- 「学びたい学問」を重視した進路指導

*ベネッセ教育総合研究所「VIEW21」2015年10月号掲載記事より抜粋

探究化

進路選択と探究学習とをリンクさせる

島根県立江津高等学校

島根県江津市▶普通科▶共学▶1学年約70人
▶進学実績 島根大、山口大、島根県立大、山口県立大、広島工業大他

社会との関わり方から 進路を考えさせる

進路選択と探究学習とをリンクさせることで、社会における自分のあり方を生徒に深く考えさせ、両方の取り組みがより深まるようにしている。

1年次では、地域の課題に関するグループ学習と個人の課題研究に取り組み。地域の課題を取り上げるのは、社会の中の生き方、あり方を考えるうえで、身近でリアリティーがあるから。個人の課題研究では、担任が希望進路や文理選択の結果を踏まえた研究テーマのアドバイスをを行い、進路選択とリンクした活動にしている。

2年次では、「自分は社会のために何ができるのか」を基に、研究テーマを決めて、課題研究に取り組み。11月に仮の進路を考えて志望理由書を作成するので、その内容を踏まえて、将来の進路と研究内容とがリンクするように担当教員が個人指導をしている。

Before

- 「総合的な学習の時間」を利用してキャリア教育に取り組む

After

- キャリア教育に探究学習(課題研究)を組み込む
- 地域の課題の考察を通して社会の中で生きることを考えさせる

*ベネッセ教育総合研究所「VIEW21」2016年10月号掲載記事より抜粋

蓄積化

eポートフォリオを活用して面談指導を充実 東京立正中学・高等学校

東京都杉並区
▶普通科アドバンスコース、スタンダードコース、中高貫イノベーションコース
▶共学▶1学年約240人▶進学実績 帝京大、日本大、東洋大他

eポートフォリオに 生徒情報を一元管理

これからの時代を生きる生徒は「自分は何をしたのか」を明確にすることが大切であるとの考えから、対話を通してそれを明らかにしていく面談指導を重視している。面談に必要な生徒の生活、成績、指導履歴は一つにまとめてeポートフォリオに蓄積している。これにより生徒の成長や変化の履歴は教員全員が確認できるようになった。そして、そうした環境整備が進んだことで、担任一人で完結することなく、教員全員で生徒のことを考える指導体制が充実した。

その結果、生徒や保護者へのアドバイスが説得力が増した、指導の一貫性が高まったなどの教員側の効果のほかに、生徒からは、「今までの面談結果や成績を見てアドバイスをもらえるので、面談を通して自分が成長しているのを感じ、前向きになれる」との声も聞かれる。

Before

- 生徒の情報が学内に点在

After

- パーソナルポートフォリオに生徒の情報を集約
- 教員間の情報共有が高まる
- 成長履歴を生徒と共有することが成長実感をもたせることにつながっている

*個々の生徒の進捗に合わせて学習内容・学習レベルを調整し問題を提供すること。または、そのしくみ。

個別化

ICTの活用により個人学習が進化 立命館守山中学・高等学校

滋賀県守山市▶普通科アカデミアコース(高大貫教育コース)、フロンティアサイエンスコース(医学系理系進学コース)▶共学▶1学年約300人▶進学実績 立命館大、立命館アジア太平洋大他

学校と家庭での学習の すみ分けが進む

タブレットによるWebテストと学習動画を組み合わせた指導を取り入れることで、基礎学力は個人が家庭で定着させ、学校の授業時間は協働学習を主とする学習にシフトするすみ分けが進んでいる。生徒は家庭で学習動画を視聴し、その内容が理解できているかをWebドリルでチェックする。わからない問題があれば通信機能を使って教員や友人に質問し、最後に確認テストとしてWebテストに取り組み。つまり、「生徒自身が模索しながら段階的に理解を深めていく学習」が家庭学習で実現しており、それが基礎学力の向上に役立っている。

今後は、生徒自身が必要な学習を自分で考え学習を進めていく「学習をマネジメントする力」を育成したいと考えており、そのために、*アダプティブ・ラーニングのしくみを検討中だ。

Before

- 授業時間の中で基礎学力の定着と協働学習の両方を行う

After

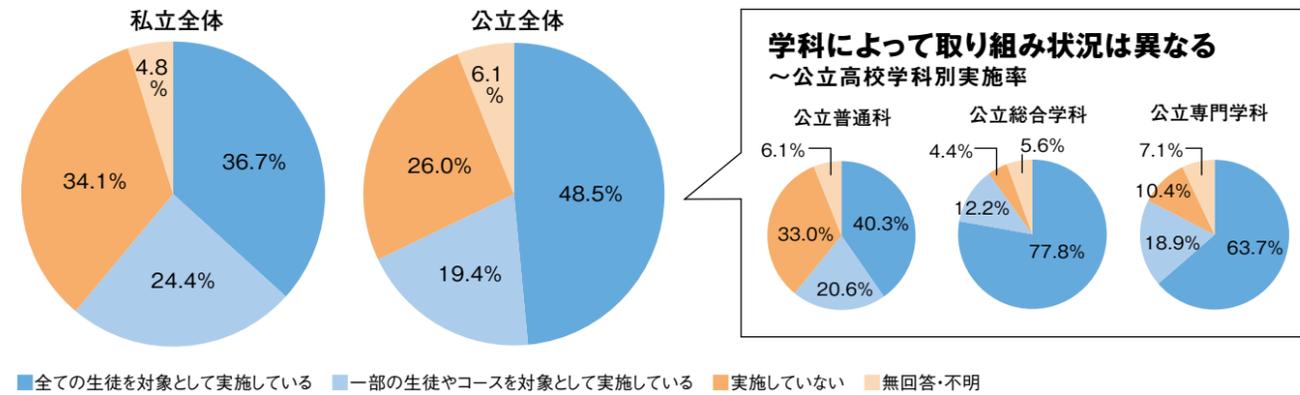
- 「家庭学習で基礎学力の定着」「授業は協働学習やOutput型授業」へと学習スタイルが進化

学び方の
変化

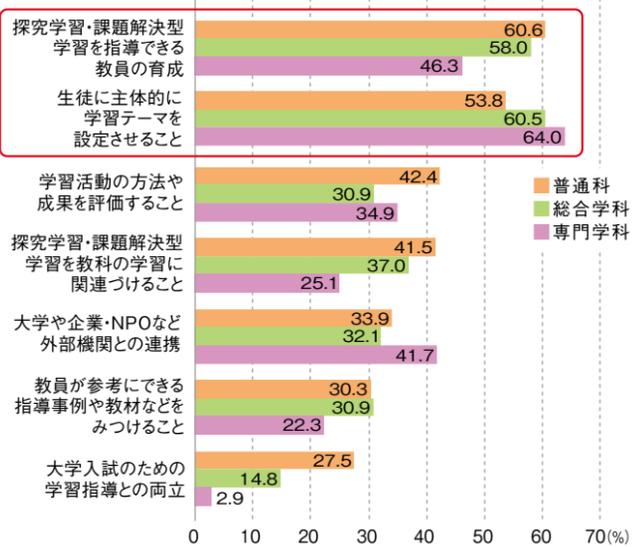
学びのスタイルはこう変わる

高校現場ではアクティブ・ラーニングや探究学習・課題解決型学習の取り組みがどこまで進んでいるのかを解説する。

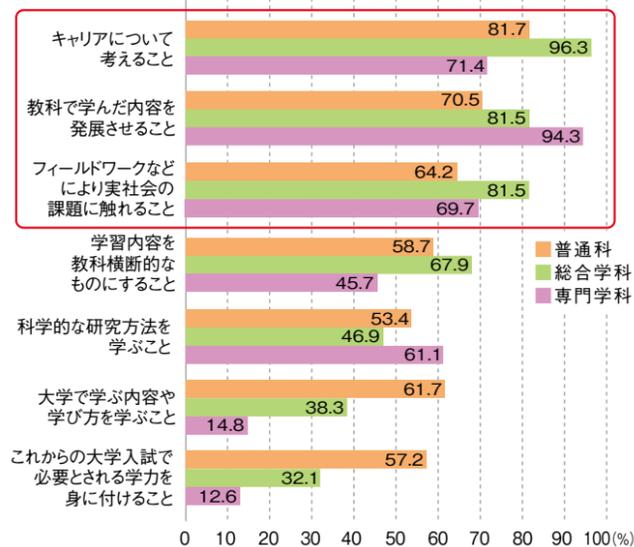
探究学習・課題解決型学習は約6割の高校で実施 ～高校での探究学習・課題解決型学習の実施率【図表4】



指導教員の育成や主体的なテーマ設定が課題 ～公立学校での探究学習・課題解決型学習の課題(学科別)【図表6】



キャリア、教科内容の発展、実社会の課題が主な狙い ～公立学校での探究学習・課題解決型学習の狙い(学科別)【図表5】



*図表4～6：ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査高校版」2016年より 高校の校長が回答 1421名

次に、探究学習・課題解決型学習(以下、探究学習)の取り組み状況を見ていく【図表4】。私立高校、公立高校ともに、約6割の学校で探究学習を実施しており、公立高校の学科別では、普通科よりも総合学科や専門学科のほうが「全ての生徒を対象として実施している」割合が高い。

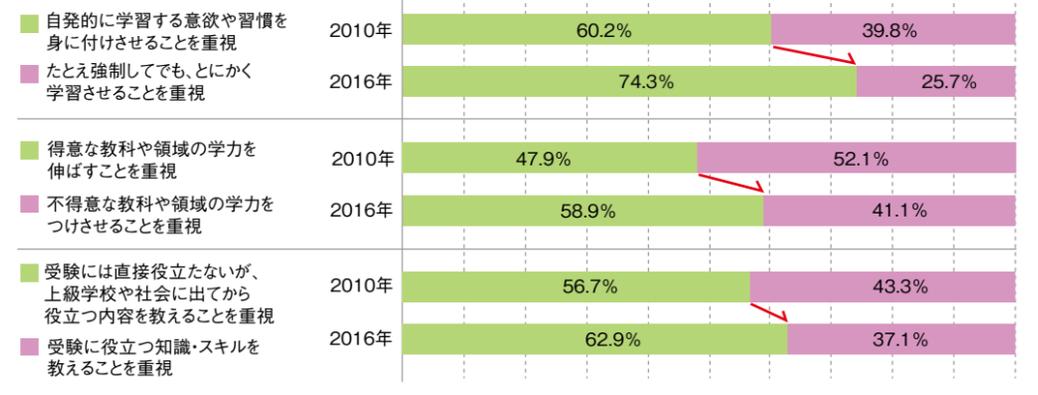
取り組み内容についてはどうだろうか。探究学習の狙いを見ると【図表5】、「キャリア」「教科内容の発展」「実社会の課題に触れる」ことの3つが上位にきている。このことから探究学習では多くの場合、実社会の課題をテーマとして、教科で学んだことを発展させながら研究を進め、その過程で自分の将来について考えることにも取り組んでいることがわかる。

一方で、「指導できる教員の育成」や「テーマ設定」には学校として課題を感じており【図表6】、この点は、大学が高校を支援できる領域だと言えるだろう。

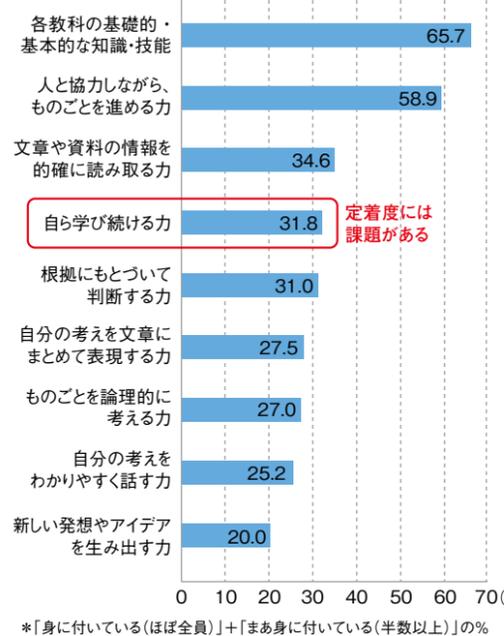
高校での探究学習の実施率は約6割

大学の取り組みを紹介する際に、「自ら学び続ける力」の定着度を可視化して説明すると、高校との課題共有が一層進むと言えるだろう。

自発的な学習を重視する傾向が強くなっている ～高校教員の指導に対する意識の変化【図表1】



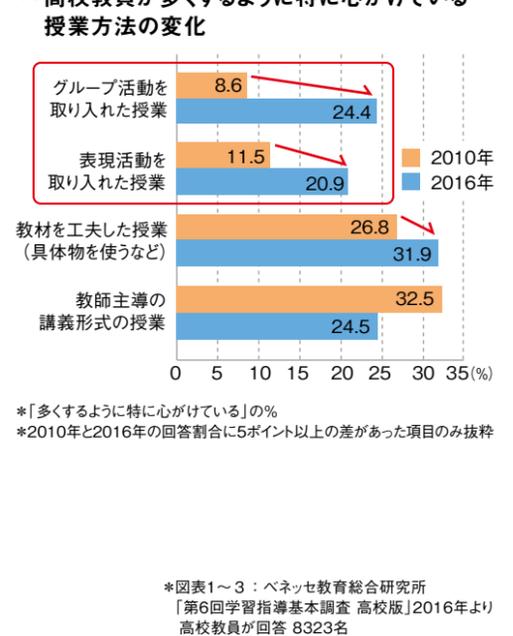
「自ら学び続ける力」の育成は課題 ～高校教員が考える生徒に身に付いている力【図表3】



しかし、高校教員が考える生徒に身に付いている力では「図表3」、「自ら学び続ける力」の定着度に対する評価はあまり高くない。これらのことから高校教員は、生徒の活動を主体とする学びを重視する指導に注力しているものの、「自ら学び続ける力」の育成には課題を抱えていることが指摘できる。

大学でのアクティブ・ラーニン

グループ活動、表現活動を取り入れた授業の割合が大きく増加 ～高校教員が多くするように特に心がけている授業方法の変化【図表2】



自発的な学習を重視するも定着には課題

高校教員の指導に対する意識の変化を見ると【図表1】、「自発的な学習」「得意教科を伸ばす」「上級学校や社会で役立つ内容」を重視する傾向が、この6年間で強くなっている。

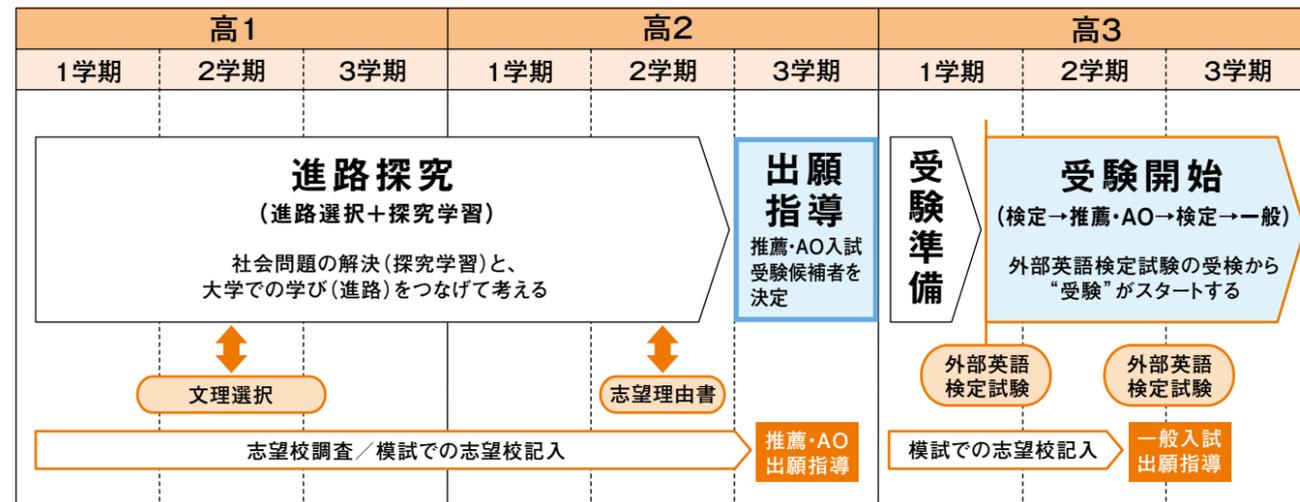
また、実際の授業方法については【図表2】、「グループ活動」や「表現活動」を取り入れた授業を特に心がけている割合が大きく増加している。

進路指導の
変化

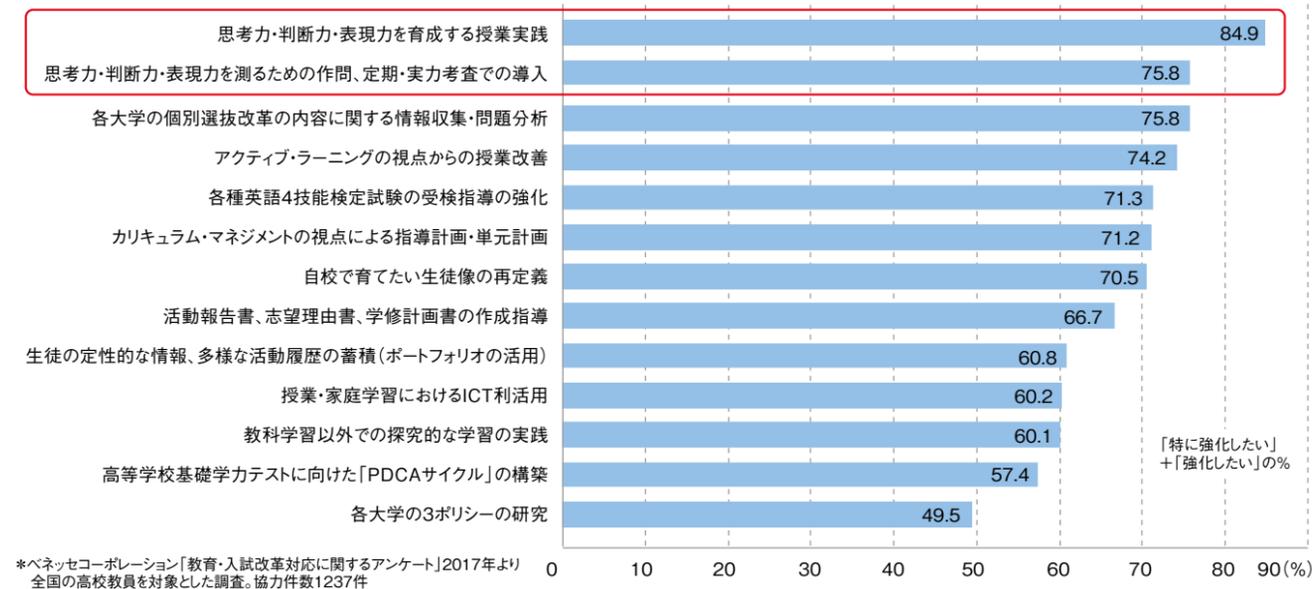
進路指導はこう変わる

入試改革の動きが、高校での進路指導にどのような影響を与え、変化を促しているのかを解説する。

教育・入試改革を受けて、高校の進路指導はこうなる



今後の指導では、「思考力・判断力・表現力」の育成を重視 ~大学入試改革への対応で高校教員が今後強化したい取り組み【図表10】



こうした大学と高校での意識の違いは、高校では外部英語検定試験を「学校での全員実施」で取り組んでいることから生じていると考えられる。全員で受検するから、一部の生徒にとって意味のある「高い出願基準」ではなく「平均的な出願基準」「加点」を望んでおり、「指導要領」や「受検料」を重視するのだ。外部英語検定試験の検討では、高校での受検実態も考慮する必要があるだろう。

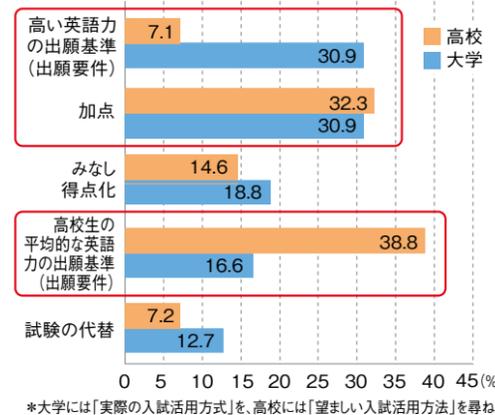
「思考力等」の育成を高校では重視している

これまで見てきた教育・入試改革の影響を受けて、高校での進路指導はどのように変化していくのだろうか。今後予測される高校での「新たな進路指導の流れ」をまとめたのが上図だ。ここでは、「出願指導が高2・3学期に早まること」「高校1、2年生での進路探究」の2点に注目しておきたい。

また、高校では今後の指導において、「思考力・判断力・表現力」の育成を非常に重視している点にも注意したい【図表10】。日々の授業に大きく関係することであり、高校教員の関心は高い。この点も入試改革の検討では外せない視点だと言えよう。

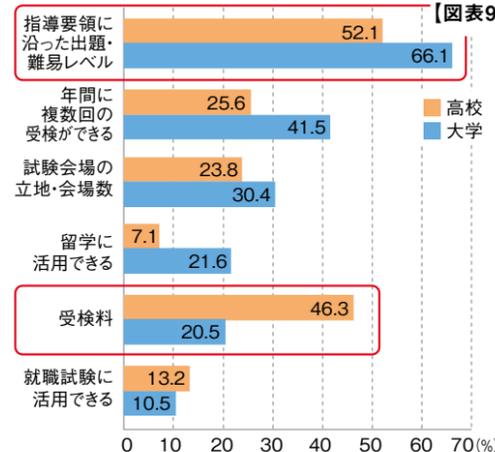
外部英語検定試験の入試活用法は
高大でギャップが大きい

~外部英語検定試験の大学入試での導入方法と、高校教員が望む導入方法【図表8】



高校は「指導要領」「受検料」重視で
外部英語検定試験を選ぶ

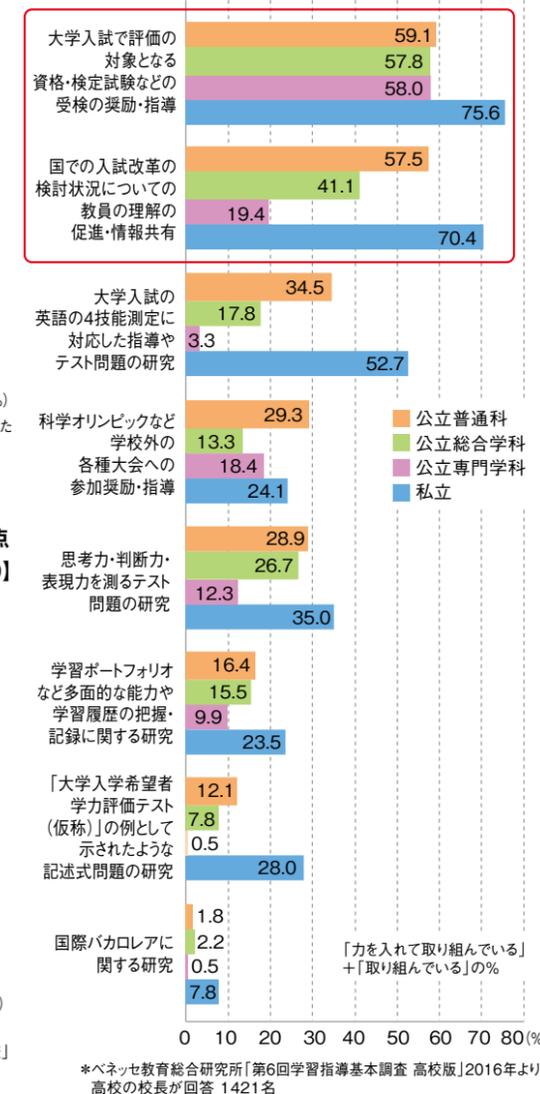
~外部英語検定試験を決定する際に重視する観点【図表9】



*図表8、9：CEES進学基準研究機構「中学校・高等学校における英語教育や検定受検の実態調査」「英語4技能入試に関する実態調査」[大学英語教育に関する実態調査]2016年より
回答数 大学760校、高校教員789名

「資格・検定試験の受検奨励」と
「理解促進・情報共有」が進む

~大学入試改革への高校での対応状況【図表7】



入試改革の進捗状況は
高校でも関心が高い

大学入試改革は高校の進路指導に大きな影響を及ぼし始めている。入試改革への高校での対応状況を見ると【図表7】、「資格・検定試験の受検奨励」、「入試改革に関する教員の理解促進、情報共有」に取り組んでいる割合が高い。大学での入試改革の進捗状況は、今まさに高校が最も知りたいことだと言えよう。

外部英語検定試験については、高校と大学でギャップが見られる。入試での活用方法では【図表8】、大学側は「高い英語力の出願基準」「加点」として活用している割合が高いが、高校側は「高校生の平均的な英語力の出願基準」「加点」での活用を望む割合が高い。使う検定を決定する際に重視する観点では【図表9】、「指導要領」に沿ったものは両者一致しているが、高校では「受検料」も重視している。